
【《あゆみかん短編集 2》】

あゆみかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【《あゆみかん短編集2》】

【Nコード】

N8201G

【作者名】

あゆみかん

【あらすじ】

■【ジャンル色々短編集その2／ぼちぼち追加予定】■作者に捨てられた話たちその2集です。完全体になれなかった話の集合、行き場のなかった話たちの眠る地。初めての方も優しく歓迎です。たまに黒くてもお許し下さい。各1話はだいたい数分程度です・H22/12/26『狼吠ゆる（ファンタジー）』追加。

開封スル九能万次郎（SF）

「九能くんて、いつも何考えてるのか分かんないよ」

そう言っただけを告げて去った彼女がこれまでに生きてきたなかでひとり、いた。

「言いたいことがあるならはっきりと言いなさい、万次郎ちゃん」
そう言っただけの時に母は自分を叱った。

会話をすると言葉が足りなかった、いつもどうしても。言葉が思うように出てはこなかった……知らなくて。

面倒なんだ、説明するのも。機器を買ったら否応なしに付いてくる説明書と注意書き。厚さ3センチもあるその本を読破しようなんてとても思えないし、困った時にしか開かない。嫌になる。

口約束では信用ならない誓約書。書いて判を押すのは別にいいけれど、トラブルが起きてからは言葉の揚げ足取りが始まるのだろうと思うと気に入らない、楽しくない。どうせ双方完全には譲らないんだろうよ、退いてたまるかと意固地になって下手すれば泥沼だ、何が楽しいんだ？

ご使用方法は決まっているんだ。今、俺が手に持って飲みかけているペットボトルの飲料だってさ、開栓後はお早めにお飲み下さらないければならず、飲み終えたらボトルとラベル、キャップを分別しリサイクルにご協力へだ。記載通りに従わなければならない……それも別にいいんだけどよ。

俺が書くものは意味が分からない。そう人に言われたら仕舞いだ、俺は何を書いても伝わらない。これは書く意味を失う。伝えるために書いてるのではないのかと疑問に思う。でも言葉はいつも正確には伝わらないし、加減なんて分からない。ああ……

「ん……？」

俺はさつき何でも屋で圧縮袋に入った『それ』を購入した。前触れもなく無性に欲しくなった『それ』。どうせいつもは関心がなく見向きさえしない注意書きだが、『それ』の表面にはたったひとつの文しか書かれてはいなかったことに気がついた。どういうことだろうか……首を傾げるが、とりあえず書かれていた一文とはこれだ。

『広い場所でお開け下さい』

俺が持っているのは圧縮袋に入った『それ』だった。どこのご家庭にもある、ありふれて特段珍しくも何ともない代物だ。広い場所で——それだけが言いたいのか？……他に言うことはないんだな？俺はそう聞いてしまっ、たかだか血も通わない『それ』に付けられたラベルに。

俺はこう考える、短文のなかに書き人にとっての十分な意味が込められているのだと。余計なことは一切書かずに、それだけが全て、それだけが伝わればいいんだと。開発関係者の気持ちは分かるつもりさ、数少ない、普段、言葉の足りない人種のひとりなんだから、俺も。

「開けてみるか」

俺は立ち寄った学校のグラウンドの隅で、『それ』を開けることにした。なあに、これだけ見晴らしがよく障害物もなければ、万が一爆発したとしても被害は小さいだろう。爆発なんてするはずのない物だがな。ついでに今は23世紀なんだぜ？フリーズドライが主流で、死んだ奴はミイラになる。不思議が起こっても不思議ではない、死者は死者ではないのだからな。

話が横道に逸れたので戻すが、俺はさつさと『それ』を開封した、……するとだ。

袋の封を開けられ中身の『それ』は空気に晒され元の形に膨らん

でいった……どこまでも。それは地平線の彼方まで、その間に家を破壊し続け、山野を避けて、川あれば下り、空へと浮かんでいったのだ。もはや手に負えない『それ』。立つ音がシュールだった。しゅるるるる。

嘆きが聞こえてくるようだ——だから書いておいたのに、『広い場所でお開け下さい』と。注意書きを書いた者の真意が伝わらないからこうなる。言葉だけではいつも正確には伝わらないし、加減が分からない……ああ。

「九能くんて、いつも何考えてるのか分かんないよ」

俺が書くものはいつも意味が分からない。だから書く意味がない。いつそ言葉なんて捨てちまえよ。仕舞いだ。

《END》

開封スル九能万次郎（SF）（後書き）

爆発しますのでお気をつけ下さい……どうやって？　ちなみにこの話は中浜氏とは関係ありません。
短編集2をこんなテイストですが、よろしくお願い致します。

H21・5・4・投稿

日本人が減びる理由（SF）

カクダ製作所では、ありとあらゆる実験が行われていた。

テレビのニュースは、パンに針ではなく十円玉が混入されていたという事件が発生したらしく、報道をしている。実験室では、今日も開発のための科学実験が進んでいた。

「ちょっとした遊び心のつもりだっただろうが、もし十円玉を喉に詰まらせたらどうする？ そんな風に、ささいなきっかけはそれが重要な発生源となり、のちに多大な迷惑を周囲にもたらすのだよ。解ったかね？ ワットソン君」

科学者の嘆きは実験室からは、はみ出さない。

「はあ、解ったつもりになりました、シャーベット博士」
曖昧な返事をして、その場を取り繕う相棒は今晚も徹夜の予定だった。ホワイトボード上に記されていた。
「ひとまずよろしい。さて、ではこれを見てくれ」

シャーベット博士は黄色い飛沫の付着した白衣の袖から細い腕をするりと伸ばして指先のそれを見せてみた。親指、人差し指、中指の先で持て支えられるほどの小瓶に入った透明の液体は、今現在に開発中のものだった。

助手のワットソンは渡され受け取って首を傾けながら考えていた。
「これは、物に『意思』というものを与える薬なのさ」

言う博士は得意げに、鼻息を吹き飛ばしながら腰に手をつきふんぞり返ってむせていた。

「え、すごいじゃないですか！」

「ああ、すごいさ、もつと言ってくれ。だが、まだこれは研究段階」
「え？」

今年三十路を迎える博士、張り切ってもすぐくたびれて、助手に後はよろしくと任せたい。

「加減が判らなくてね……振りかけたものには、その通り、『意思』が宿るに見えるのだ、が……」

「が？」

「試しに、外の雑草にでも振りかけに行ってみるかね」

博士の提案は実行されるが話をした一時間後だった。黄色い飛沫の白衣は着替えられて青い飛沫の白衣になった。助手のワットソンは思い出して母親に電話をかけ、今日の晩御飯を聞いていた。「海老フライだよ」徹夜が憎かった、せめてサンマの塩焼きなら良かったのにと彼の嗜好は嘆く。仕事に私情や食欲は挟むべきではないと知りながら。

用事を片付けた後、外の中庭にと着いた2名は早速、小瓶のなかの液体を咲いていたタンポポに振りかけてみた。しかし何も起こらない、「変ですね？」と助手は言う。

「うーむ。加減を間違えたか？ どうもよく解らん」

科学者の嘆きは中庭からは、はみ出さない。残念な結果だと、つくり直しを要求されたとみえ2名はがつくりとして屋内へと戻って行った、だが数日後である。

眠っていた日本列島は寝返りをうつてしまった。

タンポポの根を伝い染み込んだ陸は、ひっくり返る。

その日、地球人類は初めて木星に到着したのだが、そこから持ち帰った菌は世界人類に感染し多大な被害と脅威をもたらす。偶然の

ような失敗は重なっていた。

日本人は滅びかけていた。

もし日本人に出会えたらこう言っておいてほしい、列島の機嫌を損ねるな、余計なことはするなよと。

宇宙からの忠告「メッセージ」だった。

《END》

日本人が減びる理由（SF）（後書き）

やさしー宇宙人なら支配されてもいいです。

H21・11・11・投稿

勇気の星（SF）

あそこに行くと、『勇気がもらえる』。それを聞いて、少年ソウルは宇宙船ミカド2号に乗って遠くにある『勇気の星』へと旅立とうとしていた。

これはその、船着き場での話。

乗船するまでには時間があつたので、ソウルは酒場に入って行った。酒盛り場に來たのは初めてで、まだ昼間だというのにカウンタ―席が全部埋まっていて、活気でおおいに賑わっていた。バーテンダーは得意に腰を振りながらサービス精神旺盛で愛想を振りまき、首元の超ピカネクタイがキラキラと眩しい。4人ほどが座れる木造りの円形テーブル席もほぼ満席状態で、地方八方から來た多種にわたる種族が飲食交えて騒いだり大笑いしていた。

奥に進めば進むほど小窓からの日の光も転々と壁伝いについているランプの照明も行き届かずに暗くなっている。そこには音楽家たちが集まり笛や太鼓とおのの楽器演奏で技を披露、一歩前では見たことのない歌手がひとりかいつぴき、これまた聞いたこともない言語で歌声を曲にのせて気持ちよさそうに歌っていた。

様子を見ながらソウルはテーブルに着いたあと怖々と、そしてワクワクとしながら、メニューから飲みやすそうな一杯のカクテルを注文した。普段お酒を飲むことはないため、初めてでとても緊張していた。

するとそのうちに顔じゅうヒゲ面で、お腹がぷつくりと丸出しのシャツを着た狩人風な男がやって来て、ソウルと相席になってしまった。「よお」気さくに野太い声を掛けていた。「こんにちは」ソ

ウルが挨拶すると男はサイミルと名乗った。

ソウルは会話のタネで、これまでの経緯を男に話していた。生まれ育った村が貧しいこと、働き手が少ないこと、もしいつか強国にでも攻められたら、何もできなくて村は終わりだ、なくなってしまうかもしれない、そんなのはまっぴらごめんだということ。それまでに力を、戦える勇気がほしいということを熱く語っていた。

サイミルは「そいつぁいい」と目を細めて頷いている。ちょうど頼んでいたカクテルの入ったグラスと、泡のこぼれたビールジョッキが美味しそうにテーブルに登場した。それを飲みながら会話が途切れると、偶然にも隣のテーブルで何処ぞの団体、若い衆が、興奮した大声を上げていたのを聞いてしまった。

「勇気の星い！？ やめとけやめとけ、あそこにはグレーゴルといって、遺伝子操作された大狼おおおかみの化け物があるんだ。行った奴は皆、喰われたそうだ。命が惜しかったら関わらないこつた！」……

それを聞いたソウルは、即座に震えあがってしまった。「どうしよう……？」

口に合ったカクテルは何とか飲み干したものの、おかわりを注文する気にはなれなかった。サイミルと一緒に熱気立っていた酒場をあとにすることにした……。

ひんやりとした風がソウルの顔に当たって去っていく。酒場を出てからも気分は晴れずソウルが悩んでいると、人ごみかき分け元気に走ってきた小さな男の子とぶつかってしまった。「うひゃあ」「あ、ごめんなさい！」

転んでしまった男の子のズボンのポケットから、ミカド乗船パスが飛び出して落ちる。ヨマネと名前が書かれていたそのパスを、ソウルはすぐに拾ってあげた。「ありがとう」

嬉しそうに歯を見せて笑ったヨマネに、「船に乗って何処へ行く

んだい？」とソウルは聞いてみた。サスペンダーを着けた短く汚いズボンにウェスタンハットを被ったヨマネは、勇気の星に行くんだと言った。

「どうしてそこへ？」「国の皆を……お母ちゃんたちを護りたいんだ！ 戦う勇気がほしいんだ！」

「でも怖い怪物がいるんだよ。……それでも行きたいかい？」

行く目的が同じだと悟ったソウルは、ついつい試す言い方で言ってしまった。少し元気をくじかれたかに見えた目の前の小さな男の子は、負けじとソウルに言ってやった。

「行きたいよ！ ……勇気がほしいもの」

目を輝かせて、ヨマネは鼻息を荒く出しながら、言うだけと言って駆け出して行った。

見送ったあとソウルは、「あいつに恐れはないのかな」とぼやいていた。人と人が行き交う隙間の向こう遠くに見えるミカド2号の先端を眺めて、ソウルは衝撃の余韻にしばらく浸り、なかなか動き出すことができそうにない。見かねたのか、サイミルは個性的な自分の自慢のひげをつまみながら、横で口を出していた。

「あやつは、もう、行く『勇気』を手に入れておるのじゃよ」

野太かった声は肝心な途中でしわがれていた。ソウルは思った。星に行けば、勇気が手に入るかもしれない。でも、見たこともない凶悪な怪物に食べられて死んでしまうかもしれない。死んだら、村を護れない……そんなの嫌だ、僕は生きたいんだ、と訴えた。

続けてサイミルは言った、「行く必要はない」と。「何故なら、『勇気は此処でも手に入るからだ』」

思ってもみなかったことを言われてソウルは、サイミルの方を驚いた顔で見る。勇気は此処でも手に入る——わざわざ、行かなくて

も持つことができるもの……ソウルは、サイミルのおかげで決心の
つくことができた。

……

宇宙船ミカド2号の出港時間が迫っていた。船に乗り込もうと、
大勢のお客は重そうにキャリーケースを転がし、または肩からカバ
ンを携えて、手続きの順番を待っている。船に架かった橋の手前で
最後、サイミルに別れを告げようとソウルの足は立ち止まる。

ソウルは星に行こう、と決めていた。「ヨマネが心配なんだよ」
——そんな理由かとサイミルに笑われながら、ソウルは意地悪そう
に言い返していた。

「だってさ、行った奴らが皆、怪物に食べられちゃったなら。どう
してそのことを知っているの？」……

帰ってきた奴がいるからだ、という余裕きほつを残して、ソウルは後ろ
を振り向かずに旅立って行った。

星空のなか出港した船が見えなくなっても見送りながら、これか
ら山に籠って秘密兵器をつくろうとしていたサイミルは、2人が帰
って来るまで待っていていようと、心に決めてまぶたを音もなく静かに
閉じていた……

《END》

勇気の星（SF）（後書き）

ブログこちら↑

<http://ayumanjyu.blogspot116.fc2.com/blog-entry-185.html>

H22.2.12.投稿

ようこそシアター（ジャンル無）

家の玄関のドアを開けると、そこは映画館だった。

興行場法に基いて知事の許可のもと、興行会社『DON・T K OSE』は、映画のレイティングシステムに従ってミニシアター、『あゆみ館』を設立した。

キリンを愛護し、キリン愛護団体とも深く繋がりを持つその映画館は、1日のファーストデーや水曜日のレディースデーなどの他にキリンだけに適応されるサービス、『キリン割引』というものを設けている。

『キリン』と名のつく芸人やメーカー、幻獣には、とても嬉しいサービスだった。さておき。

指定席はなく自由席のみ、ただし先着順で座席を決める。世界遺産に登録でもされていそうな神殿式の外観で、一步なかへと踏み込むとそこは、映画館というより癒しを追求したかのような印象を来た者、来た者に与えていくオアシスだった。

精霊とコンタクトし森林浴を楽しめる庭園、形式にこだわらずに12段階の緑でご用意した畳張りのお座敷、超温泉や餅エステを完備、秘孔マッサージ室、住職による住職のための座禅教室や広い意味でのママお料理教室、内容的にカテゴリの偏った図書館、美術館、博物館、動物園、リアル渦潮プール、ドリンク&肉カレーとこった煮バー、……おいおい、映画館かそこはと、完成予定図が初期のものとはかけ離れ過ぎていき、仕舞いには『気にしないでいこう、そしてキリン』という社長のいい加減さと願望を採用しての建設の運びになってしまったのだった。

さて、そんな余計な情報は一切知らず、『私』であるカナルは館の案内人に先に示されて、話題だった映画を観にと入口から楽しみに入っていた。片手には串に刺さったポップなコーン、もう片手には手提げの婦人ミニバッグと酢アップルジュース。鮮やかなキリン印が紙コップの表面で歯だけを過剰に表しているが、きつと何かの啓発だろうと決めつけて無視をしていた。

家の前に夢のような施設。私の家がどんなものだったのかは語らないでおくが、比べてどれだけ我が家が激しくつまらないものだったのかを思い知らされる。少なくとも癒しなどない我が家。大変、施設の存在は有難いものだった。さあて。

噂の頻度の高い映画は、上映されて。

イスに座って並んだ観客は声を上げての笑いと、ビューティフルと賛美や感動を、目には涙を。

盛り上がりは、最高潮を迎える。ああ至福の境地だ、もうどうなっても、いいと。

『私』は目薬をさしながら観ていた、視界はスッキリとはしたが、徐々に時間が経つと眠ってしまい。起きたとき、するとそこには。

……

……

館から出てくると、観客は次々と感想を好き勝手に漏らして、帰って行く。

面白かった。つまらなかった。

美味しそうだった。芸術ですね。不味かった。空気が読めません。驚いた。つい突き飛ばしてしまった。橋の上。駅のホームでも。もうすぐ3年目ですね。何がですか。浮気です。馬鹿言ってるんじゃないよ。すみません。

今、ここに『私』の感想を記しておこう。

上映された『2010年宇宙の度々ランダム』は、意外性づくしだった。

主人公のアルバトスがヒロインで王女のナニーを救いに、活躍する傍ら突き当たる壁。妖怪。

次々と迫りくるモンスター。蟻、熊、セイウチ。電気ねずみ。

手に入れた称号『人畜無害』のほか、『神と呼ばれたケント紙』、『成り行きまかせ』。

渡された武器、30cm定規。羽の生えたペン。土偶。

不可能を可能にするアルバトスの魅力に、『私』は最後まで圧倒されっぱなしだった。是非、まだ観ぬ人々にも、ご堪能頂きたいかと。

映画は。素晴らしかった。オススメ。

ただし。

観終わった後に無事に生還できるのかどうかは、保証しないでおく。

以上。

《END》

ようこそシアター（ジャンル無）（後書き）

ブログこちら↑

<http://ayumanjiyuu.blog116.fc2.com/blog-entry-188.html>

H22.3.12.投稿

狼吠ゆる（ファンタジー）

クリスマスに狼ひとり。彼は、狼と人間のハーフだった。

自分の身の上を呪ったこともある。だがそれは、彼に何物も与えなかった。雪降る街角、そんな背景が彼に似合い、いつも雪が降っている。彼の一部のように。

名を、ウルフという。母親が名づけたらしかったが、その母はもういない。ウルフが4歳のときに死んでしまった。雪のなかで、ウルフを胸に抱き死んでしまった。何もできない凍えたウルフは、吠えた。

オオン……暗闇のなかは、彼の声がよく透き通っていた。やはり雪が降っていた……とてもよく似合っている。

母を置いて彼が目指したのは、街だったのだ。母を山に置き、彼は歩いた。冬が街を取り囲み、夜であっても雪が、黒を白銀に変えている。しかし街だというのに人間の姿はまばらにしかおらず……恐らくは家のなかで過ごしているのだろう、時々笑い声が窓の奥から漏れていた。ウルフは、ある一軒家に近寄ってみるが、すぐに立ち去っていた。まだ4歳だったウルフは、道に足跡を残して去って行く。

灯りの無い方へ。彼は忘れてはいけない、狼と人間のハーフだった――。

30の年月が過ぎていた。ウルフ・ドッケルマンは、34歳になっていた。

彼は自伝で出版した本に、こう綴っている。『人生苦もありやは楽さ』。スイートルームで高級ソファに腰かけて、ブランドーの入ったワイングラスを片手に夜景を眺めていた。今日もグッジョブ、と、窓から見えるビルに向かい、ひとりで今宵に乾杯していた、そして心のなかで、吠えていた。

オ・オーン。

明日も強者だろう。窓から見える白銀の世界は、変わらない。だが彼の世界は変わっていた。雪降る街角は彼には似合わなくなっていた。

どっちつかずの彼は人として生きることを決め、そうしたらこの通りに、彼の昔から残ったものは名前だけになった。母がくれた唯一の形見、彼はもう吠えないだろう、人である限りは。……

街角のどこかで、別の誰かの遠吠えが、……した。

《END》

狼吠ゆる（ファンタジー）（後書き）

しみりと。

ご読了ありがとうございました。

H 2 2 ・ 1 2 ・ 2 6 ・ 投稿。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8201g/>

【《あゆみかん短編集2》】

2011年1月6日05時01分発行